

はじめに

原始時代以来、信濃国・長野県への文化の入口には大きく二つのルートがありました。その一つはいうまでもなく、太平洋側から天竜川にそって南信・中信へと北上するものであり、他は日本海側から信濃川・千曲川にそって北信・東信へと進むものでした。この二つの文化の移入路はその後の信濃の歴史のなかに大きな影響を与えてきました。天竜川、およびその周辺は信濃へ文化の入る道筋として、重要な役割を果たし続けてきたのです。

信濃という視点から、南信濃という範囲に目をむけると、天竜川は諏訪地方の水を集めて信濃から外に出し、伊那谷を広げ水を運びながら、この地方の動脈のような役割を担ってきました。天竜川が作り出した河岸段丘上に水田や畑が作られ、天竜川がもたらす豊富な水が農業の源になりました。豊かな伊那谷は天竜川なくしては生れなかつたのです。まさに天竜川は伊那谷の生命の母としての役割も持っていたのです。

しかしながら、天竜川は全く逆な側面をも持っていました。荒れ狂う天竜川は、住民にとって恐怖の的でした。天竜川の異名として「暴れ天竜」はよく知られています。伊那谷の歴史はそのまま天竜川の水害との戦いでもあったのです。

天竜川が暴れているのは、全体の時間のなかではわずかでしかありません。私達も多くの場合、近代工法の堤に囲まれた静かな天竜川しか見ていません。しかし、自然はいつも静かではないのです。天竜川もいったん荒れ始めると、大変な災害をもたらします。私達は、常に災害に対する準備を怠ってはならないのです。特に近年の治水事業の進展により、巨大な堤防で囲まれた天竜川を見ると、つつい安全だと考えてしまいがちなのですが、自然の力はそんなに簡単に制御できるものではありません。それこそ災害は忘れた頃にやって来るのです。

災害に備えるためには、過去の災害がどのようなものであったかを知っておく必要があります。そこで、本書ではこれ

までにおきた天竜川およびその支流、そして天竜川の源である諏訪湖における氾濫や洪水を年表にいたしました。収録記載は、天竜川の中流部に重点を起きました。天竜川の状況を知るのに諏訪湖の災害も必要と判断して、諏訪湖の氾濫などについても採録しました。また、事実の確認は主としてこの地域の地方史・誌の類からいたしました。

本書をみていただければお分かりのように、戦国時代以前の知られている災害は、それ以降と比較すると大変少ないものです。これは災害がなかったことを示しません。現在に伝わっている史料がないだけなのです。逆にいうと、戦国時代ぐらいを境にして多くの史料が現在に伝わるようになったのです。ここに事実を文字で伝えていこうとする人々の営みが盛んになり、文字もそれだけ浸透してきたことが読み取れるかもしれません。いずれにしろ、災害の事実がこれ以前に多く伝わっていないことの意味も考えてみる必要があります。

過去に災害が起きた場所は、再び災害が起きる可能性を秘めています。私達が、災害に備えるためには、ともかく災害の事実を忘れなくすることが重要なのです。本書がその一助になれば幸いです。

凡例

●は史料集などからとったもの。

▲は編纂された年表などからとったもの。

災害の事実のあとに――()として記されているのはその出典(参考)などとしてあるのは、多くの記載があることを示す